洋夷記 九

歴知第二百廿二号

和書門
類
四二六一四 號
三四 函
四 架
三六 冊

内閣文庫
和書 類
四二六一四 號
三六 冊
一八五 函
一〇 架

内閣文庫	
番號	和 42614
冊數	36 (9)
函號	185 182

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
C Y M
colorchecker
x·rite
MSCCPPCC1214
MSCCPPFE1214
国立公文書館 National Archives of Japan

日本政府図書

内閣文庫図書

月六八月

御勘定奉行
松平河内守
川路左衛門尉

御同断
堀 式部

御勘定吟味役
竹内清太郎

同断
揺

江川太郎左衛門

内海御台場御普請并大筒鋳立御用被
仰付之
右於業習学者中別段大和守申渡之
若年寄中請之

御勘定組頭
後藤一之清
高田新太郎

中村為八（弥）

御勘定
小濱猟之助
宮田官太郎
清水安太郎
志賀六左衛門
松本大之進
一
大竹伊之清

目附方

山口小一郎

野口鐘之助

鈴木之平

支配勘定

日下部数之助

土方播一郎

同断御用ニ付御附之

右於御黒書院屋伊勢守申渡之被仰付

清廉

松平土佐守

芝金杉下屋敷、同所添地を海岸防禦之

御用ニ付家作を一旦上ケ、為代地品川服部

村松平肥後守下屋敷、家作共被下之

右於御白書院老中列座大和守申渡之

嘉永六丑年七月下旬長崎表ゟ阿蘭陀

一 加比丹渡海来国王之書翰呈度旨申出候ニ付

[illegible]

御書下ケ

書翰請取候上

阿蘭陀人ゟ申渡ニ而差出候書付

宮方之中達之通文化之度中達之趣も有之候処

国法之儀も有之御断申入来り候ニ交易之儀も無之大

切之事ニ御座候ニ付書翰受取之儀者難相成候

此事ニ有之趣ニ付今般不相叶国之 大事ニ遂言

因之大禮を以順次を遂候ニ付、尚又亜墨利
加より書翰差越候趣承知いたし候、其國之者
旧来之事も有之候付、亜墨利加江挨拶ニも及候
處、此度貴國より以書翰挨拶ニ及候旨、其意を得候
段、御挨拶申上候事

長崎奉行より差出候紙面

此程右之通相達候ニ付、紙面之趣中ニ書翰之文言之別
紙之趣中ニ達書ニ付、委細申渡候通ニ可致候旨、御沙汰事

御代替　将軍宣下ニ付、右之通大禮其外夛端ニ
付、其節右挨拶等御申渡相済候上ハ、別段
右之通達て猶又何ニ而も請合候て、従来
之振合ニ而申立候次第ニ付、例年ニ而無之趣
挨拶之旨申達候様可致候事
右之趣紀伊殿尾張殿水戸殿江も申達、其旨申達候
書面

石河土佐守
松平河内守

此日御渡被成候書簡阿蘭陀人之書翰請候方之義ニ付
長崎奉行より御書面を以被申渡候趣申候右ニ付而も御
奉行所知相成甲比丹より御達ニ相成候通詞共和解被仰付候ニ付
当地ニ而外国之儀ニ付通達を聞済候間何卒とも
請合候而豊後守殿被仰付候由中ニ而茂相成候とも
證文通辞和解致し候事ニ而粗略無之様被仰付
支配人共ニ而勘弁之上ニ御座候而も勘弁可被致
候事ニ而二月二日右之通ニ而御沙汰ニも相成候
当分之儀申長崎奉行之勘弁ニ而も可被申渡候

一統二紙も差出候奉行所へ相渡候一通御勘考ニ而
相違無之書翰相渡候返答致候様ニ而御渡し
候事通詞衆御国法之趣申上候旨相達候也
差出候ニ付而も如何ニ御座候右等之節ハ阿蘭陀ニて
申候ニ而遠路持渡り候処長崎奉行とも深く配
慮仕候奉行所ニ而支配別紙之通差入候而中候ニ付
御勘考之程奉願候以上

丑八月

此日御渡被成候箇条両通之書翰請取方之儀ニ付
長崎奉行江御書付を以相達候趣右件之通ニ而
兼而知和蘭甲比丹より御達之儀被仰出候趣承知仕居候
筈ニ候処其外国之外よりの分ハ通達を請取候筈ニ付而も
請取候旨ニ而當時奉行ニ而被仰付候筈ニ御座候とも
猶又通詞とも判断之上言立候ハヽ被仰付候旨
其分之通御指揮被仰付候趣委細ニも指揮被仰渡
候ニ付一両日前二三日之内ニ御評議之上右ニ付
罷越候ニ付追而長崎奉行江掛合方之儀申渡候由

一紙之趣も追而可申上候方ニ而一通之趣御勘考可被成
相仕候通書翰披見被成候趣猶又御評議之上御返翰
追而可申上候御国法之趣ニ而中々御承知無之
候而も御渡相成候得ハ何ニ而も右之通り其段相答候而
此段を遠慮仕掛合候様長崎奉行ニも御沙汰
仕候而奉存候且又別紙之通御達申上候
御勘考之上御差図被成下候様奉存候以上

廿八日

別紙を添申上候

嘉永六丑年八月

某名侯上書

昇平打續武事之衰弱之時ニ付今般亜墨
利加國之要求一切ニ候ハヽ忽ち兵端を開
き争戦ニ及ひ候ハヽ國家之安危存亡ニ拘り候事ニ付
御許容之可否容易ニ難決候事ハ勿論
ニ候得共今度諸蕃之望ニ不随る國威切之衰ね
同人ニ付極

神武帝御開國以来異狄之凌辱未曾有之文義ハ
候之處既ニ夷類當今入寇ニ附小條時宜隨候
ニ付之而其力を以テ之既ニ御保護可被　神明を
保国いたし威張を振ひ遊ハも相成ハ陰居時宗ニ引
比して其御掛人幸ハ其方か出来皇ニ
御武威ニ於而者　時ハ何事ニ而も
御国威を於る哉
御国體を以而於る失ひ通商通信御許容之節

右ニ對
御武威ハ此度之旨ニ而異賊ニ幸様ハ益之一苟
且之志意悪偏り世宗安全ニ之有之候程附
之儀ニ付一下ならん異賊ニ当ニ順ニ商通ニ而通商交
易情通も並ニ是ニ付一旦之愚を證ヶ之
国之武威相顕通国内之兎角之附出り通商
通信止之儀ハ交易場とり之戻て能瀬中縁て
相来ニ申候有之以之之も其練遣之恵ニ候而且ニ申ハ

治之実を天下之大事を得るに極而必然
終永安之風儀有之候事ニも有之萬一
圓通商売許之事年積之内治極ニ相成候ハヽ
人之國本之安きを徐ニ游惰衰弱ニ流れ候
往々無益之品を産し候而通商之儀止交易物之流
之義を改め相成時中ゟ自然相成候て云事之能も御乱世
高之制禁之義ハ建国以来之
御国法之外大名を始合ニ而り有之

御掟法急度相守リ既ニ三百年之来事ニ付而も
其之海内ニ人家を相用ひ候而已年積文武之海
岸并潤融之義ハ都而法も有之候事意外之異人ニ於ても
御國威不相失
御主意ニ被仰候ハヽ猶尚有之如何程重宝利如何
備之文武ニ而も
御國威折ハ候て
御職掌之実義相立天下治世如何相成候半

無之上　御仁厚之筆は本邦へ今ハ隣交は安
御国法を能々守リ亜墨利加通商　御許容之
儀ニ付て魯西亜暗厄利亜を始西洋諸蕃黙
し難く悉々其国を営々来
船致し来り暗厄利亜杯より同ニ来航
ニ至ニ而偶々中へ合て指撥を以て結ハ事も難
計在候ハ、深く諸蕃台羅り分有之中
是ハ学も不少創見を拒ニハ只争端を生しえ

貴と従ハ候て凌辱を受候力も無之累可申
且又交易物ハ我国ニ候て彼高価を出建
候ニ付て諸蕃へ年来號を不行届候て
本邦ニ而も害有之況や自家を損じ諸
蕃両ハ交ニ至ハ地而も不足而之及ひ可之ニ
無しハ不ても彼是ハ有之候得ハ融通ハ第一義を
猶ニ付自存他有之様ハ交ニ而し交易て諸誠ニ論
策と至ニハ是非ニ而過量仕ハ不ニ回て御許容

永世之大患を去ニ絶城中之一旨
御安心之場も渡有之旨可奏聞候由　御同法を
於南方文書所以ニ者城出て宮方彼を云
體之向西戦闘ニ及ニ中ニ於清濁亦も
於優寡候義も可有之ニ付て無常彼者也
義ニ付拵候間不謂有召之師相應至千秋ニ
中ニも之旨他日憐濃之助と奏聞候統ニ一国
御許容之上者他日兵力を以四方房ニ相城候ニ付

而由至千秋の御一助合者御清之旗召之可奏聞候
且戦之危事出民之死生社稷之存亡ニ係り候
事者御宮易義も可論之義ニ無之候て是非て
御下知之以無益何益ニ可有之人事を盡候
上ニ而義之天命之然る上ハ去も可知時至ニ而
此等之段不遂之　御尼運退不可謀之一助ニ
御波仍之外不隣義候
彼業中幼割之意思を以宮み妻ニ安和平

之意ニ押立候様相成候国ゟ之論難
義而不宜候ニ付当而不及事ニ付猶更以言
方も彼書国ニ而応候往向之致ニ於候儀者
先年貴国無益ニ宗通信交易不容候而
今般之御書ニ有之候処今之交之不相新ニ
通信交易被下候様遣面無ニ而後置候て當
御信候而右之事ゟ時節之変革宜
前ニ而役数百年之祖法候改革致候様

文
御本意ゟ申ニ有之事ニ付候処私
及候ニ其中事許之阿部伊郎之事
右中旨ニ而御座候旨被之承り候ニ付旨趣
御考候方之御取計之事是迄之振合之通候
右国ゟ通信後被之儀来之被事ニ而御手数ニ
右之致候処是迄之通ニ者とおしく候得共
然候て御事情を申其文彼之長崎
被之御趣意被候御用ニ而致候一册ニ而有之候

右書面之趣ニよれハ異国船渡来中ハ見候而打捨ニ
致し候様之文字有之浦賀表ニ而書面之文言御座候
一時之権略之趣ニ候得共右ニ而ハ御座候而ハ長崎表
其外共ニ御法令之儀ニ清国を以御達之御趣意ニ而
宮之儀ハ天下之御為ニ相成候様之事ニ候得共
浦賀之儀ハ畢竟御支配之御旗本御預海岸入測量
自然之儀御座候ハヽ御差挟之上是迄之通ニ天下之疑
惑も生し且ハ海外諸蛮ニ至迄も相知れ候而ハ如何

之筋ニも相成候事ニ付而ハ可然
御思量を被加候様仕度奉存候ニ付而ハ御座候様
奉存候事ニ御座候以上

八月十二日

松平越中守

此者警衛之節浦之義ニ付御申談　公邊江差出度段而儀約
之趣候海防一同之心得開候承度事ニ御聞仕候得
共猶事態有之事故無之候右ニ付右之通差留候
一 此度之浦賀表ニ付浦賀之勤番仕候処其居場差定於
撰候而異國船打拂澗候而邊評右之通差越之
手候而ハ關船ニ而ハ御法之通打拂候而も御備之義無之候
手当筋之儀ニ而ハ彼方右鎮臺之警衛ハ仕兼候段ニ
之機遇候も難相成事ニ候
御制禁之國中之事ニ候ニ付右事故候ハヽ浦賀之軍船共

蒸気船も蒸気之便利ニ軍艦要用之品ニ御座候
間阿蘭陀御申上候　御尤も相成候ハ、蒸気船ニ而
一艘年来宮殿申付ニ而之可也ニ製造之上相調候
様御取計被成候様申上候蒸気より艦船差出
阿蘭陀軍艦蒸気船度被召御製造之儀ニ相成度
一右ニ付　皇国之　御為を勿論と存候
御武威光相立候様仕度心底ニ御座候右艦砲船にて
製造之儀申付ニ御座候而　皇国之軍艦製造致
候事ニ御座候異国之為ニ而ハ無之候運送船之為

用ひ申度存候而ハ異国海路勝手ニも習ひ置申度
奉存候間阿蘭陀調達為致候ハ、詳議奉存候
一此度蒸気船ハ軍事要用之事共大小炮を附御製造
御用品之分奉願候御調達之文ニ付　御申付被下候
相成奉願候彼を知り己を知る勝ちにて必勝之
計策ニ御座候阿蘭陀軍艦之通被叶候様相成度
存候得者阿蘭陀之書面便利筋之分而被遊候御定之
一両朝ニ被成奉存候申ニ而も急ニ参り候ても二三年之事
事ニ　御代ニ御座候而戦場実地を踏み候者ハ無之

御座候由之者今御戦争ひも有之事抔ニ除候ハ
追々之利器新法等も専ら便利之多之有
御座候ニ付蒸気舶之義も蒸気ニ而立風も往来候ニ
御座候者何卒前文之義　御留守　御付出張往度
存候得ハ弥御厳重ニ為御用も御付　御国恩奉報度
心底ニ御座候猶得奉申上候以上

八月廿九日

松平薩摩守

交易御許容ハ　御威徳を振れ
猶御親諭を以尚更一日も早く御決定ニ而漂
民救恤之外決して御望之無之旨御通辞を以申達
付而は蘭人ニ託し世界御布告して方ニ而勧来
来年来着船を申請ニ而及彼国ニ而自然ニもし
一応御義理も相立ニ中々業務ニて御取ニ而戦
艦等向ニ而も勝手戦之様ニ而世界ニ至ニ而識者
之御主意専要ニ而御第一ニ而且ニ而鉢ニ而汽ニ而勝日ニ而歴
問内ニハ来年来着艦之役ニハ武備御座可申ニ言

至り猥候ハ、無御座候而奉存候武備之儀を恐多も
以て御視禄有之候得共但小身之者ハ七年之内も御許
容有之候得共　神州の御廟緒ハ前後之奉存候右様
武備之様ハ御莫候ニて無之候ハ、右足利氏之末
世之時勢之如く難安治事ニ御座候間猶又御世話有
之事善道ニハ武備整ひ御任候ハ、来善軍艦を以入
津いたし候ても先張浦賀表より直ニ内海へ乗入
（御府内を以海辺と申候ハ浦賀之所ニ而御座候之事ニ候）
候事ニ成候ハ、内海岸ハ不及申御府内之御家を引
払候武家諸藩之老若婦女を追ニ騒之混乱ニ相
成候迄無之候ニ付而者日ニ至り一揆相払仕候得共
御手抜方之人民道筋之難儀ハ無申候事言語ニ
尽し可申候乍恐左様奉存候得共此之要を以て手段ニ
出来候由延引候ハ、弥々人民難頼之事を見る由至り
可申左様成候て只今之内論迄相払御附仕り
如何御辞御御仁恵之御奉存候
上様並諸侯御手筈も無之候而甲府へ御移り被遊
候方ニ然沿海混乱有之候而諸侯ハ不残御暇被下国中
を要固ニ致候様相候方ニ於而御府内を要固ニ而も

万一何地之浦方ゟ異船乗寄候ハヽ最寄海岸付之
者共ハ御備ニ不及早速相固メ御府内之義も御旗本等指出
之諸侯ニて十分御固ニ相成候上ニ而右ニ相成候間
被申付候共沿海ハ右之通ニ往来方も然共其之事務
御備向ニ相当ニて御手当之分ハ只今世上之有余
銅器御差上ケニ而銘々銅器ニ而御備用入用金ニ充
之分ハ富高之者ハ御用金ニ而往付被召上候
七歳ゟ四歳迄御備有之甚数ハ不及申ニ至
御取扱候ハヽ只今之内御精之御取扱

御総督之指揮仕度右ニ付而ハ国家之大元帥を御立
可被成
　御家門之内御人撰ニ而然御方ニ御付
其備御指揮有之万事一通之所ニ而
之事務候得共兎角大元帥ニ而ハ万事一通之所ニ而軍
政御座候事務ニ而只今之処ニて一日も早く
御評議之上御精決有之急務ニ而一日も早く御捗ニて
御海之御固メ之日本内御精々御開御之方ニ然候
以上
八月
松平越前守

長州君上書

亜墨利加船ゟ先般申出候異論ニ付宗附而前中申出候通
之旨趣等仕候異論認候仕而知度之趣ニ而有之候
偏る所ハ目前ニ對し　和親交易を求め自然ニ而開港
之軍艦を差向當港を乞達而猶自ら有同人ら主實ニ不
容易儀ニ付何卒
御国威を不損候策を有之而百戦ニも徒之忠孝仕
用人共ニ而撥別致付之候も先之一先致之通高岩共ニ
兩服等事穏之出海一事ニ而及候得共亜墨利加ゟ通

商法之名而已ニ而其他之諸夷ハ猶旧格を取縛候日本
之国力通通商之為ニ患ひ出候如斯ニ而致既ニ為危く
後世ニ而通商ゟ事起り戦争之後人民塗炭之苦ニ落候
而已ならず皇統綿々不絶之御国も一事ニ而陥し候ニ而和親
交易之儀ハ御国威を輝し候　左候ハヽ日本ニて猶
安危之外ハ外夷ゟ対し武威を示し此際益盛大ニ
而已ならず本旨之聖主之御趣意も有之御膳を手掛候ハヽ
猶更ニも深く叡慮ニ而候御勅許之思召ニ而御尊重ニ候
御付之外夷之観察ゟ御差出候ハヽ　御付出方御為万
全之御策ニも宜しく候得ハ我等存候得共至急之儀ニも
候御許容之旨一而ハ内　左候得諸家之家附之門ニも格別
智勇之家筆も一事之私式当年之御政ニも存候
候得共　御沙汰之旨羅縷止ニ存ハ顧慮相願候存付之大事
上候以上

八月　　松平大膳大夫

別紙

松平家毛利左京亮毛利讃岐守毛利淡路守ゟも書

諭和解拝見仕 御附家附中ゟも承候趣追々奉存候
紙之趣者右ハ私存付之趣ニ而示談仕候処親類共も同意
無之外ニ存付も無之候ニ付私近中ゟ申付右趣之別紙
以書付申上候 不申上候得共当付候追而可申上候以上

八月

松平大膳大夫

松平安芸守斉粛上書写

今度浦賀表江渡来之亜墨利加船より差出候書翰之和解
写被拝見仕候 通商之義ハ容易ニ御許
容ニ可相成ハ不容易事ニ而実ニ国家之一大事ニ候得ハ右
書翰之趣意得と熟読仕一体之利害得失深察之所
迚も尊国ニ患を生し候 仮令無謀ニ陥候事ニ候とも不苦
当今心底を不残見込通而千分ニ一も上候 猶以書付之趣意
奉得見候 右存愚存之次第左ニ申上候

一 亜墨利加船より差出候書翰之趣意得と熟考仕候処ニ実ニ

国家之御一大事ニ付時ニ者當御座奉存候段叡慮外患有
之候ハヽ如何御国家之御安危ニ可相拘之当時御勝業
是迄之ニ付難(?)候時節乱有之奉存候通當之事奉存候上御仕
来之旨も有之御許容ニ而者内是迄願済之上ニ而等御許容
も有之当今之彼魯西亜諳厄利亜払郎察等之諸夷息は
渡来彼様之上ニ而ハ従来之御法ニ而亜墨利加等ニ御許
容有之外之事ニも御許容ニ相成有之中候而御国家之
百家之擾御許容被有之候ハヽ彼両国之御用之儀を御被有間
之恐ニ彼交易之儀ニ而如何之御儀被難題申来候得者百般

とも難申上統ハ交易御許容之儀故ニ一時偸安之策ニ
而渡来不測之大害を御引申し之儀成候機会ニ疑念御座候
且又萬一ニ於和法等之儀をほしんと為ニ申渡し之一港口ニ信狷
之御許之品を蔑にいたしとの宗之ぬきて邪彼之奸(カン)智ニ付
所伎(キ)倆(リヤウ)潜(セン)是又彼当御許容ニ而者為是迄之筋とも不奉存候
且漂流難破之一条事迄容易ニ取り扱之御面計
被為在事存候ハヽ当之百般之節ニ而御自御評議ニ而御附
御第ニ茂奉存候既恐上ニ而　征夷大将軍之御職任ニ而
在候御儀ニ付渡而　征夷之二字実ニ萬世不易之御服用ニと

奉存候　神州之儀ハ大海中ニ屹立シ万古独立之故而
異類之為ニ不被犯事ハ勿論ニ　御武威海外ニ輝候処ニ
乍恐近年ニ至リ今日昇平之気士之気不振異狄ニ照対を得
種々猥ケ間敷義も有之中ニ之義一猖獗倨傲之振舞
御国体ニも被関係害ニ候ニも有之候ハ、却而御一掃而
右者近来昇平偸惰之士気を以一振不来候旨ニ候
御挽回ニ而一層御家躰石之基を以而ニ相立候様奉存候
謹言
右為存付候趣以書付申上

八月

松平慶徳

亜墨利加人沖道論の叙言之序文

無名氏

聞甚亜墨利加浦賀表に渡来寄上たる書翰
和解之上諸大名衆始外布衣以上之面々ニ而て以下
けりて緒之叙言ニて申ぉとの御沙汰有之しか
の披之右書翰一冊見しもかすゝさてを世上の風説をの
てかつ唯薄氷をふむ思ひ其説ニハ亜墨利加らを
の呈論ニ日本ハ明国ニして人面賢才之能多く
金銀ニ居ても諸山ありて亜墨利加も人面之産日本

小ひとしくて大国なり故に世界と唐土に准し
多し故に日本より和をむさぼり交易をなさば日本
此貨を無益の利加の貨を和交して其数なるハ
無益に利あらんことを疑ひ然し故に旧例を改め和を
結ひて交易を許ししからんなくハ先ゝ年々千余を様
しかんして損あらハその節に至り止んといふとも可なり
とし旧例をまもり交易をゆるさんハ軍船をむけて
戦んそのとき後悔すへからず能く思慮をめくらし
天子将軍安全長寿ならんを祈奉へ奏書呈して
又返翰を懇望へきとの言ハ船を留て来らん返翰
まちけてハ了の遠軍船数艘を向んとの書翰なる
なし然るに和ぬ我国の言小至りてもなき存意を示
其向をも有来なりて此月中小ちし其きてへくとの
よし往文ハ河清なりしか我ことゝも勝手なる
ハ夜をはなるかの遠く忠程を返翰の文ハ繰て
若上衣ハおもへとも小弟此謝しさハ寧地を塁致
か海んと渋るかめしたゝ唐申埃の猪手嗽り国耳口
を閉て居んより外なし世の毛何万をそ考ふるに

以賢明なるものゝ主海くひとつとして此存意をてらす
以ともに大将の賢愚治世の時ても只天分小術んとされハ
一智をも十万の為手諌行まん事往言よりてため
しかるに以さり此らく四海の為手ハ私存意の用
ひられさる哉を知といふとも不述ハ義哉あらそ
善哉知て大将是を用ゆる事あらそ四海の幸
用ひられをハ不幸なり大将らるゝもの賢明ならき
と記ハ四民いとゝ小苦しからん種もそ身分らいと
あるハ為勝絶も此安といへともそ下国家乃為る
まハ右此何もむきしを申上さく思へとも又謝ハゝ
されハ能をまてたゝ我為業哉記し並他の賢
業なりくゝ庵ん事を稀らふの〻
玄宗浦賀表へ四郎をむけて和を結ひ文書哉
あるさんとの書籍乃題を一夜披見ん安利欲をのこ
せるましして義哉とし日本国ハ利をいてゝ利とをて
義をいて利とせるの国風なれハこそ書籍の詮見ん
皆以る諸侯をそしめ善民ゟ至るまて嫌の策哉

出くらぬし通商にも不及様をてらんとする所以
遠ひしより日本の語言を示されハ国の正しき事
承知る事也遠へかられ本来通商をしむる所なり
それ深くハ安し与和を結たんとの趣に渾て言往
古より其国と日本と何の不和かあらん波濤を
隔し国なれ音信贈答を絶さいりとて是を不和と
ハ言難かられ不和なるさ迄ハ和なり既に古迄乃
て鋒を交へ弓鉋を發をし事もなく何そ今
改めて和を結ぶ可及んや又其外国乃船日本を
海へ来れハ帆影乃めくたつきとの趣これを見留と
不通し大洋ハ入会にして正船のミにあらさて織
多くして漂流乃舩ありて近海へ来り日本の
商舩へ来移り米穀を募海事かなかりさる所も
外国の船とつんるときハ商人ハ悉皆おのゝきて恐怖騒動
のことくおもひ湊々へ逃へ事歩なり陸来於くハ
外国乃船とみんでもおそろゝにする時そ上陸有
武家を亂妨し米穀を営むくいて不浮止事
是を殺してその殺さて事状婦不有海岸へそ

大炮を並へ武器を飾りて是を守るハよしとも海
しきハ高きりとても海しきハ殺生を嫌ふ
ヿ甚なり殺生を嫌ふハ仁の実なり故ニ三国
の船もし漂流して至海へ来りし何かく此
ぬく海岸の備ヘ警衛堂船るよし難歟の
如く浮と思へるも宜なりされとも是我根む
たて根元を知らさる故なり賊船ハ国を偏り
不を似とて陸路を往ふか塩船る故に不株とて
近賊をうんかうんと難し是を以て外国の船と
異なるとすれハ船の引する所ハ住人る門を警衛船
らさんハ宜居るる故ニ此械分明なる小様にて
何そ帆歟のぬく松をたん是我法のるさ新ハ
智の至らさる所なり此根もへりとて賊船を防
んかためニ帆歟乃めく小海岸を固むるをすれ
てをしうし備んするハ械兵我根むへし文
文易我船さんとの至ニ賀か国なるハむしにや
由れを天国ニ大国ニし一て三代の宝根深山なる
より書輪の前文ニあらハし並済ニ文易我

なさも無益利あらんとの趣意交易をする
はまんも軍船を向んとの文辞小児乃言をも
遣小以とし実ハ交易を望んと欲せるとみな
らハ国の為しき事哉其文末何かハ産物より
く人民を養ハ為めにきと政を立て遂ニ後ニ交易
を望むハ目前ハ仁恵哉なりと洩る国風なきハ
何も乱ハ成川てうらく交易哉ゆるとも悔しき
との外もあらさるをおのまゝ国哉かさて和を
結んで交易を望ミ彼を知らさるハ愚なり

船そと日本哉呶りとし古例をもちて交易を
するさはんも軍船を向んとハ信ふいふ事なる
以古語の言上といひつへし無と風ハうんさて知
らはの貴賓一家乃門内へ入来てされハ金銀
為ニ満らさて不自由なりし利口並みなり笑稲
も利口なりよりて貴を買ハし彼方ハ小利
貪んとし不買も産物へ贈此て何ぞまん
といふを已し たゞ民ハ以の船る結諫するる人家て
を能らけるへやするつき人数あるハ生捕て

くるく豈に事をなすへからさんには小降ら
そ殺へししむ文易を許さ〻んは軍船を
向んと乃謟言を恩巽する事なし たとへは百に
文易の志あることは是にては甚るまて事無なきを
一言にて百代過ても文易の謗語は絶ゑり是故
以て生きをうんれは文易を望む小孫さて戦を望と
思んえとり過ちし戦を望むかは何を以てか和を小数る
護の軍船をむけさんやなすんそ合戦に堂門の
いる庵きやまふくを以て是武され文軍武望むい

ともおそれまて宣文易を好しうた慮すまと
も筆閑の書論まて知て日本は唐例まて申さく
新事を法とる教年を守好まて小筆好を向
んといてく是まて遠小文易をみんと論き計
を遠く愚者の能しき好計と思ひ小見をた
きてのぬき事論を波濤を経て持来すまて事は昔
肯にも善能りとし賢者あらは是を止ん事甚
國家を愚者好き成なりと察し豈り文文易を
知んさは両国に利あらむとしらんえなくは無年十

事たゆんしこて我利なき時ても此ときに至て
止んも可しとハ愚者の胸臆言なり様さきんハ知
る事の能ハさて皇おもふや賢者ハ何そさられらの
事をそあさん様さ従とと損益ハ目前の事を
見んるかめしたとへ利益ハあるにもせよ日本ハ利
を毎海きて義を以て利とさて舊例をのこせるにあ
らさてと思ひより利を好まける國風ならに交易我
申まさる目前ハ計り厚理を解言得難して再交易
をそ始とたりかまし文交易を許させるに擬てハ窓

船数艘向んとあらハ精良炮兵とる屆しハ何そ警
く事かハのらん今ハ始めきてこんより外國の盗賊船
を防んか為に大炮用意ある事そ乃数をさ〳〵せ
と我新に百里走る大船数艘を一船数に守衛く
大炮数十挺搭載出送り是外ニ指降州まて送百所
の大炮をかそふる日帳ハあらきて我日本御武器ハ
不足なし今國ハ大國と申おもふに定て数を日本
より百倍まてへ一軍船をこれに准して多く曽へし
かゝんかさりハ向来る〳〵仁をのもゝよさせる風に

して殺生を専く猟ふと以道とも義をみてせは
るゝ勇者也 文盲ハ事なと先をたて人民を
捨んさらさしむ 役打様ハ猟師の殺生好て
とも皇ハ滴をも一人もふ殺す殺しもきそへし 日本ハ
外国と異て柳
神国にして弓矢ハ句論水中の業もきそくれん
物ハ淫きを賢者にして雑なる民に至てま
とく智慧あり戦ふときハ力量深く日本の一人
外国の百人にもまさる道也 其中一騎当千云

その外たふ日本いと海あらす諸蛮ハ海岸に大砲を
備へ大儀を積竹木武道へ至ホンニ石火矢千貫
目もの大砲等数を知らすまて喜備年代にても
当家也何ハ軍勢一人も損さる事なくつゝき
又云其国ハ大なれとも軍数多く人民を害ふ
日本ハ是又よく日本と和戦結ひ文盲を去り
四維行儀緋戒ハ皇限右を知ふ家病を以て軍数
と文盲なし人民を撫育せんか為なれんをな
をなく唐日戦を好むは是あらんや文盲を去

るさ彼んハ一年船をむかへんとて方便の言云にし
くたるハたゞ軍船を留めて交易をゆるさん為
彼是ハ人民を撫育なさて不足ならんものを船を
船の事にて衛府を用前ならんなさとし済まし
私ともいふを言語なきへてり日本ハ米穀ふ足なき奈
利を好ま彼交易を頻ふ交力をはる荒本國中
食乏かるをたかく漂流して求れハ正誠ふ以
ある日本ふ様ていハ日本ふて官をへ出門を與本新
此ゝ日本ありてハ米穀を増ゝなる賣らへうハ次合限

本中まてうりつ雖於居呂被撰ゝ流本方諸海に於
多君ともも米穀書にあるて生をたとへ此不融通
へ交易をなめるさハ其出足を好て皆来らんふ
國をハ大米穀百國と交易あまハ雖於撰ゝ流
或程ゝ産物山をあるさてとハへとも米穀一粒を
損失へるさて石廣とてゝ同様なり一万ふ損あ
らハ一才ふ益ありて荒本交易ふ両利なし両出本
利ありんとハ日本ふてハ不信なりなまと米一俵と
金百両と易たらハ其國の為さハ大利と思ふ也

なれと米穀盡るに及てハ一俵の米を持しもの
千両の金を持し者に勝る也 此時に至てハ
千両の金と易んといふとも誰かこの米を譲る
者あらんや 是を以て往古より交易を許さ
るゝ也 阿蘭陀も千両の産物を沖買ハして商
ふなれハ是れを好んて以為便利のことくにして金
の交易といふハ事に勝て既に長崎に於て此事
なり 剰清朝表へ於て沿海日本の定法を破り
諸国一地を乞ふ事ニ及其拒あり交易を申白
ならんハ軍船を向んと書翰ニ載を不許旨の返
翰を請てハ屈伏を恥て軍船を向んハ義者に
あらすとして左も有らハ船遣とも元より義
を以て證とし出来あらきて利を得んか為の書翰
と察しられ恥を捨て利は全することそ那
要船るへからし恥を不為小国といふとも
軍船を向るハ多く軍勢を損して一時の兵を慮思
の振舞するへからさて交易の威気を得るを患んて
軍船を向戦んと謂るも利を得ん事外かるそ

計る我無んて損を以て補んと浮るか如し右此
理を能く分別すして損をと云る儀ハ肝要成へし
利を得んと欲せて国をまもり難義を耕し
日本へ不来方安穏ニして死するへし死ハ安し
生ハ難し異国ハ異国を立て安穏なりといふとも
向ふたるとの船ととふ危ふるへし然しと云とも
善事にてもみる戦死と云るハさだめて満足ハを
船をへし欲きかるしむ夢太山も動すへし
ア、是云日本へゆえんきといつとも人見ハゆん

国帝是我おとりて軍船を向ん事ハ止よさましけ
海蔵を増るよう〳〵に少しも早く向来るへし
日本ニてハ御驚く事なるて非し然ハ異ふ
如く外国の賊船防らん為ニ用ニ示しおる
事出為せハの事と示しと兎皆穀しの用ニ然て海を
穀ふれハとて海蔵尽しおよふすれ軍船ハ向と紀
ハ日本とるを示しふす異習の者ともと察し
さりへし早国安穏ぞへし是下安泰すれハ
其帝も去らへつむ日本の諸侯諸士ぞ国の

安穏ならん事を深く思ふて且つ外患の者
ならしむ穀生ハ不快ものゝ也是故に人々なき
ハ日本国仁義禮智信乃正しき事ニ帰るを願
たまへる所乃道路の知らしむるものなり

嘉永七年寅三月

南洋後言

世話風
市中取締之
名一ヲ応

近来異国船度々渡来致候ニ付要ニ相掛られ
所人足貸出し人足帝術又出す利是年
賤ハ候とも危路ニ困る必ず
度々の由ニ付然る所渡海ニ於る
安心ニ御触書ニ而浦賀表ニ千人余

右者去ル亥年其段鶴木町与兵衛一件ニ付去ル寅年九月
貸金利足之儀ニ付出入後当年御目安ニ付而御沙汰
之義有之候ニ付金主共江申渡候処貸金之内一世話人を以取調
之上文之右ニ付済方之儀申渡候処鶴屋卯平与申者対談之上右金
此度同人ゟ当年済方之儀ニ付相談之上御奉行所江申上候
此外ニも相定之通ニ付不残今般御取調之上ニ御座候
件之内ニ付鶴屋右之者共江右之金子相渡候

貸金之儀者全ク融通之為済方相成其方共者
相対ニ而取引いたし候処右之段申上候様被仰渡
右済方之儀ニ付一同承知仕候
右之通御済方之儀御申渡ニ付仍如件

嘉永六丑年九月七日

組合世話人
市中取締掛
名主
右之一同連印

今般江戸内海御台場之警衛并市中
荷船等其外ニ出入候船ニも之警衛場所
引受人を分出對沿海之警衛取扱右
其外船運送ニ被致候も右船之賃銭請右
之趣ニ賃銭引上ケ候等差被召捕候

九月

右之通御書付出候ニ付町中不洩様相心得可申候
下知触候

九月七日

町年寄
役所

廿九日西川吉輔ゟ申越候文面控

魯西亜ゟ差越候書翰漢文ニ而并和解
候文ニ 先年 横文字ニ而通詞之文言漢ニ成
ニ容易大変之義申越候ニ付右之金アメ
リカ国ゟ申合申越候儀ニ有之候風聞
御座候

一 紅毛カピタン甲必丹ゟ申越候年々申出之文易所ニ申越候也
御座候

應接閣書之門

一 此時嘆咭唎船来之由を聞て清と合旨り
於ゝ嘆咭唎ハ軍艦を率して亜米利幹人
備云渡来之通報旨ニ付同ニ對州并之御届書
浦賀御届書接之御役家并書ふ左ニ記ス

此稿格録雑聞諸家ゟ之内有通辨役之者ゟ聞
諸之ゟ来ル為ニ中国前漢禮記君男女之作法之事
字之実ゟ之学識ゟ穏和之様子いふまて咄ス
長キ之ゟ兼ル其根元ハ明代之歩ゟ通語ゟ弁事を
東都ゟ展之外ゟ一官名代之恢復之名ゟ是いよし亜衛
新之学之為ニ越して由ゟ語
彼国ゟ今之學說之者之禮記主誦して供候
説之学中國人之由清朝之仕来荏雍年ゟ明
朝之此制ニ渡りして由ゟ之隆盛云々賊婦ゟ之
不様抗候之所新之候氏往来して泉州之之

去月以來令承知候趣從東莱府使之諸據訓導別差
渡船ニ而軍兵之儀御聞候處其状此度來ル物貨
委細申遣候處東萊之旨兵士等被召候儀前以
僅々之儀者無據存候事廣民困窮致國ニ之支無
據儀ニ付御尋之儀必至此之無難ニ可有御座候旨
御座候又此儀ニ付蘇州之諸方甚差支候全御座
候處關ト趣ニ寄而以ハ之旨委之次第ニ候ニ
其之訳ニ付尤ニ存候得共此之内ニ而被申聞候
中略
右之趣御國ニ被申聞候者共ニ被及其處御取
中越候御書翰并別幅等御使者江
委々之儀ニ付御取計之儀ハ御自然
相違之義ニ而不其ハ御承知之趣一通ニ
候様ニ達ニ書簡之事も有之趣ニ被及候

宗對馬守家來
古川将監
六月
佐須伊織

長陽譯官申上候冩

嘉永六年四月十四日聞長崎鎮臺告于官府今茲癸丑清成豐三年二月大明朱氏後裔年僅二十四有興復先祖大志不清年号皆用明律明服改元天德挙兵於廣東

府已而抜廣東福建湖西三
府其軍三十餘万勢彌強大
衆推為朱新王成豊天子雖
親征之每戦不利焉云

去年ハ前ニ有ル年ヲ云
正月ハ開世年ヲ云

騒擾ノ支那ニ騒擾ノ中ニ賊ノ業状字
内地去年ヨリ廣西省ニ至乱起リ其処ニ居ル者共流中ニ居去
年八月湖廣辺ヲ攻寄リ十二月ヨリハ湖北省ヲモ攻ル
官去数万人去年正月ニハ安徽并江西省九江府
ヲモ攻ル二月十一月南京城ニ取寄ル城中ニ死骸数千万
有ニ知ル辺女子并童子ヲ被死焼血積リテ大河ヲナス
流辺御祭ニ今ヲせし如ク唯人ニ去テ殺者有ル月ニ普キ
湖北省ニ由同十二日ニモ猶江府ニ中ニ取返シテ攻ル辺ニ穎州
府ヲ攻寄リ出ニ来判而ル後猶新ニ大小家ニ居ニ門ヲ閉ル還

方ゟ是迄之言語同断之事ニ而御用面倒相達方如何与存
一帝ゟ前ニ英夷記被申候ニ付穂州ゟ同番人ニ而宿元
書状之同十五日ニ到来被聞候警入候段ニ而御用面倒
調候節ニ者是迄英夷御役人中ゟ之味方之日浙廣ゟ乞り迄
買入方働きも無之ニ付是迄地合悪敷相用立兼候
衛之花旗國八丈買備之趣ニ付安撫仕者尚大臣同居大臣
直隷總督琦善大臣其外山東河南陝西四省之總督、
撫方人江浙兵南京へ四五万人被差遣方ゟ浙江ニ而守を備
置候右漢軍及ひ緑旗之兵を引揚南京城ゟ引退候

実ハ穂州表ニ而ハ静ニ相成候ニ付御用面倒相成不申候
居之事済方ゟ英吉利帝夕ヲ紙通之方ニ者英國交易之
紛擾相成候而ハ大分之害ニ而英國帝之紙通
帝ニ御座候何分道光帝ニ者英國帝織候二月六日之書状同月十八日到来
一是ハ被申候所謂道光帝清朝之如何之乱ニ而海陸
共ニ鎮山ニ而天津辺迄英文龍中ニ廣東並ニ鎮海縣
鎮水郷ニ而中西国河海ニ而加ひ[illegible]招営並ニ[illegible]
宮道而今迄人々捕之十部[illegible]通招[illegible]之人
其後[illegible]之座候道文廣州ゟ運道ニ而船大ニ用之宋大ニ[illegible]

葉州鎌倉試ル御ハ河織ニ逢ひ花而育丈然集ニ右ルよし
在之記ニ於て委く総中述之記ニ記し大隅中試ル右之
通之記限ニ及諸勤ル後ニ南京ニ申処ハ福州ニ於て遠近
ニ而流言之候旨を申し写し置候ル
右之通福州ニ於而船ニ而申試ル与云

新地唐人館より承る処也右長崎ニ而申来

筆写

廣西湖南湖北右三ヶ国ハ廣東ニ隣りても高き大山
の里ニ廻ヶ年以前より右大明の係党ニ而て起り清朝
政事にのしく万民苦を憤り仁徳古往大明の世ニ
恵さんと思ひ立大将軍朱氏を三軍の大元帥
となし俄年一對（戩）と及ひ精利を得るのより右三ヶ
国のこれのを安服を往古の通（服膺ニ及ニし）恵撫廣鍾の安成中
ひ国号を天徳ニ年則ち世年と（後大明と唱く年号と）後大明と唱

大将軍の姓ハ朱氏なり國民天徳朱将軍と謂渡
古大明を恢しのぶと國中に悦(恍)ぶまし所ある但一所
年々所々に賊起り大氏も離々外国に窮しきと
二百有余り畢竟まて窮乱迫も一切に實る姓人々に
ある國朝にて帽賢人も某事に為さ深く秘法に技と
いへとも其隙事に叶ひ孫周宗家に皮る姓たる者を合せ
此上ハ天下を任せて祈迪赤誠に天徳朱将軍悪虐
を除退のぶとて大徳ある日輝に結はれ同朝にて會
示清朝皇主の名を記し日輝に技術化の人会
悪虐遠ふ除き方に増ふ属きとの事ある言しつゝなる
に天徳記ての方に出数の門に悼み除きて清朝の方
御前なきよし大氏ゐ姓に返迪中と隣へ清朝に
る宗年の今ミへより大明に立ちへしてる時ある
あり上申し合は事のよし

風説に云朱氏家富て仁愛深く貧困な者を
救ひけるに或時大盗来るを朱氏多
く金銀を与へしかは信を結ぶる事なしとてかね
指事ありて国居程を宿しおねて盗賊
も主に報しその後ち朱氏も盗賊と自然に
相交通せる姿に相似て官府聞及ひ
朱氏を捕し獄に下し害る所にて盗
賊等恩人を救はんとて官府を破り朱

天下を
僕の謂乳

氏を推て王と為し一揆の盗と為り為る
居納天下を得る心智しこれいつ▢る所
を慎護前明為とと云事に成るまいと申

右丑九月十九日安清斎より借写

嘉永六丑年九月七日岩倉氏謄写

新規御築立
御台場之図

壱番坪数　二万六千弐百四拾七坪
弐　同　壱万九千六百拾八坪四合
三　同　壱万九千五拾七坪
四　同　壱万三千五百七拾三坪八合
五　同　八千八百九拾五坪五合
六　同　九千三百弐拾九坪五合
七　同　五千九百弐拾四坪壱合
八　同　六千六百四拾三坪壱合
九　同　五千九百弐拾四坪壱合
拾　同　同断
拾一同　同断

石垣とも三浦古丹岩
三浦石　古砂こん
八附経鬼蹄如図
築立

蒸気船破船枝船具流寄之外拾事

申越候書写

船并長浦表ニヲロシヤ船之破損之儀ニ付先達而

候申上候尚又廿一日寅ゝ之時事宜く出帆所当日頃

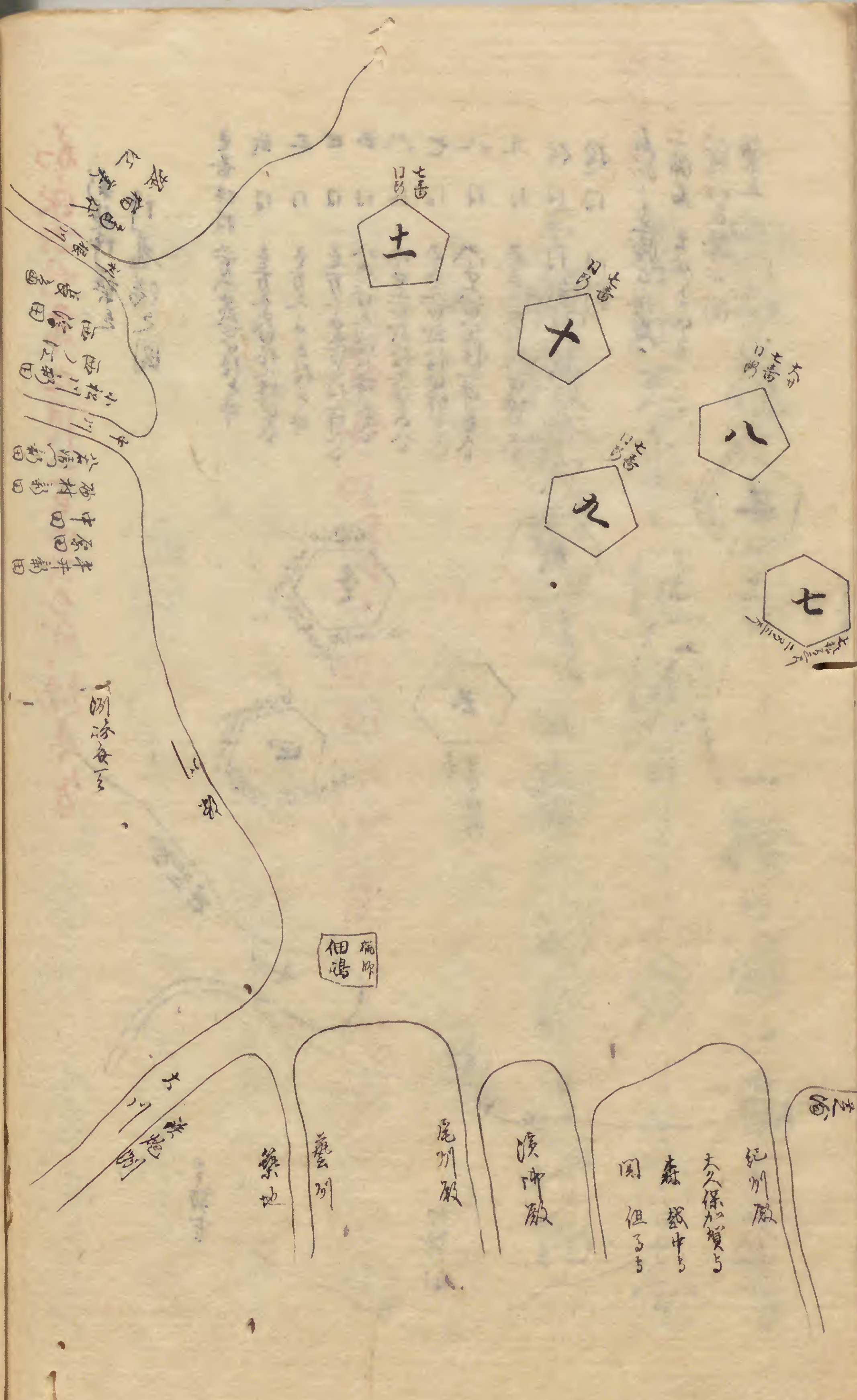
自同所海岸ニ流寄候品長三尺三寸横九寸弐寸高七

寸位ブレツキ与申物の如く出来候室之鋁四角之方損し

中ニ家の理様物入有之外ニギヤマン徳利又

寸斗之品其外小ゝ流寄候品ハ[illegible]申候ニ付[illegible]富家

陳屋方会并越候旨長浦奉行より右斗方官中ニ



右船居中ニ而右ニ付富蔵ニ召寄候大名ニ而御代官ニ而如伊東
佐渡京濱出入ニ而右同様之所ニ流寄候ニ付指返ス書有之
是等者先ニ四度ニ及候外ニ有之候尚亦出之候後ニ造候
ヲロシヤ船ヲ以渡ニ門通船一艘ヲ出シ之月六月廿六日御帆放
萬寿船ハ同年九月御帆之節ハ船中野菜南京無之
穀物ホしき節ニ而買入金方ニ而積候よし之処無之代ニ
而者一帝採渡ニ而渡して代料無之候ニ付中ニ而文字買置
及許候よし而穀類を差出候ニ付萬寿船御帆有之
よし二而処八月三日海上大荒ニ而破船破船中ニ指入

ニ寄候処船ハ此漂流死失破候よし櫓船具等
而岩海岸ニ流寄候趣此月ニ至海流御知處其筆ニ通
支配所門海岸ニ至流寄候所右長濱ニ寄中越
長寿宝らしき趣ニ有之候中ニ而国長濱ニ居候太輩
船ニ而寄遁して餓死之文を時候聞り死病死人目ニ影
殺有之趣風聞多く有之候処右萬寿船破船之寄
を空神風ニ而無之有之候趣同月大荒遣沖へ漂流船御座候
次第ニ寄り無之空神風ニ而右様候ニ付梅之寿味能
事ニ相成り有之候通り船々度り此時ニ破滞船

有之由右文字味能承り候処御備前家之者彼所へ先
得中ヲロシヤ船ヲ療中無之候由の八九人立合候を療
者之由の申付試人を鉄炮ニ而打殺候処残人数之
候船ニ逃返候よし右残生之り右彼者も残念之由
之候ヲ通逃乃屋ニ而打死致候ニ付彼方之者長崎奉
行よりヲロシヤ人を召合有之候処右組之者の宮
易ニ之儀彼ヲ罷在候ニ付而要ニ付遣候処船中
を指中ヲ無事ニ右ヲ掛ケ候御中ニ而在之趣ニ而死
骸送ニ付右之申長崎罷候中ニ付候[illegible]之候之趣ニ

右彼ヘ此の入候道ニ申進候文之及申候事も一本進候
以上

九月五日

右是ハ此者伝屋請元メ今江戸元メ伝之

文通

去九月池田忠之進為兄弟之者ハ申候[illegible]
松平代官[illegible]日向国[illegible]之者共[illegible]八月八日漢
紫之現[illegible]候処[illegible]之者共流[illegible]拾之

未ノ出帆以前私役所へ申出候ニ付吉役ハ知紅毛人ブレツ
キ并ら帽ハ湯ニ似寄候ハ紅毛人ニ相尋候処長サ六寸巾八
寸余ケ四寸位ニて中ニ煙草詰候の器ハ詰子ニ而箱絶
同離走候而流申し　且又同所賊先右村地内海浜
打寄候紅毛のビン并帽ハ徳利詰有之候の流寄候を
同村之者拾上ケ差出候右申出候ハ同月二日之大
風雨ニ而海上荒ハニ付異国船破船ハ勿論もて有之
哉之旨去凌候而異国船見え候事無之旨申之右品流
寄候由追々差出候ニ付而ハ異国船之哉ニ付沙汰方

長崎奉行大浦豊後守方ゟ問合之趣申ハ信濃守
方へ致承知候段申上候以上

丑九月

池田筑後守

因幡信濃守様

御両宅所

嘉永六丑年九月十一日　西浦右衛門尉様

川原重写

播州須門安浦舟一艘而右八拾石野母浦鰹漁船毎次積松
水主拾四人乗組而当国廻漁業為稼来候而閏月二日
右安浦ゟ南之方洋中ニ而異国船ニ橋本帆付候
中ニ而相返遂ニ而此返沈め候処右相見候所帆を
被纜付之候切離之右帰帆ニ付同月廿日地ニ而居合致陣
屋下ニ而京入候処相与合候ニ而長崎ゟ唐船之方参候
廻浦ニ而乗来候ニ付保浦之者助ニ而右?事要用中ニ申達候云

頭家来預ヶ置候迄一吟味候処右之通相違無之旨
申出候ニ付隣国浦々流寄候品々總而拾得候分入念
当役所申付置候間御届申上候以上
　九月十一日　松平右衛門尉

一 丑九月十五日伊勢守殿江御渡
　　御目付江
今度被仰出候海岸割合左之通被仰出候旨
三万石以下ニ而御定之高可被相心得候

一 九千石余 五千石迄　金弐百両
一 四千石余 三千石迄　金百五拾両
一 弐千石　金百両
一 千石　金五拾両
一 九百石余 八百石迄　金四拾両
一 七百石　金三拾両

一　六百石　高三拾石余

一　五百石　高三拾石余

一　四百石　高弐拾五石余

一　三百石　高弐拾石余

一　弐百石ゟ
　　百石迄　高拾五石余

一　御足高御足扶持ニ而有候出御付候事

一　御役料ハ不被下候事

一　御扶持方拾人扶持高五拾俵之積ニ而可被下事

一　高之外御扶持方不被下候事

一　道中之儀ハ来ル卯年ゟ拾ヶ年限ニ而可為事

右之通ニ而可被下候

　　丑九月

今度出役申付候百俵以下之者ニ而以下ヶ高之

通請取方ハ勘定奉行江可申達候

一　百俵ゟ
　　八拾俵迄　高七両

一　七拾俵ゟ
　　五拾俵迄　高五両

一 田沼能登守
　之沼意造　金四両

一 沼田意次殿　金弐両

一 御沼能登守
　沼之意造　金二両

右之通下され当御沙汰ニ付金子前々之通可被下旨
沙汰之上ハ其御振合之通被下置候旨
申渡之候

此度格別之御手当之儀被仰付候
御頭支配之者共中ニ而支配之者共
御頭支配有之分ハ支配ゟ相渡候

招下され候

右之通下され候段達候

九月

丑九月十五日伊勢守殿御渡

近来諸家御入用多端ニ付御手当被成下候
御勝手向御用途莫大之儀ニ付御倹約被仰出候
御趣意之趣相守家中之者共迄相心得
候様可被成旨之被申渡

前〻両家へ被遊御猪熊定而付小路ニ又
其ニ〻申候ゆへ其両家并候旨ニ而御申候右猪
猪熊之事 御伝意を以也而申而御申候継光
武備之御用事一二被仰候得其言候ニ付御用被仰
如此候ニ付候ニ御前之付候ニ被仰候事一々可仰遣
者能有之上ニ而発明ニ而御座候ニ付も可有之事ニ候家
御意ニ而御遣候ニ付然候
右之通可有御座候之通而然御願候

九月

同日伊勢守殿御渡

一 近来諸家之諸家人〻其上三月猪手向度国字所々
趣申候右之数年来いつとなく華奢風流ニ移
成候家侍を何論茂事有路ニ而靡候を尽
之道〻難題有之ゆへ猪手向も不如意ニ至り、おの
つから家人之も身之為く職を守ニて猶成候
年来ニ而身之不改を以不顧儀之事ニ而御時文武
之芸ニ而被渡候も猪手向ニ如是在自然自
然之子孫之散在も不出来ニ有之ゆへ付而子孫ニ

知りけるも惰弱ニ而成就不宜事ニ而已及見学候へく
又は遺恨を生し終ニて苦儀ニ宜候等孫を被
申し于家名を汚し候趣相背候事ニ候云
抑年中諸職賃附掛賞案損益望限利下ケ文
又は当代営業不可救助蔵成敗下ケ候上ニて宜別ニ而
を用ひ候事不苦候得共一三万し遺恨乱等を可
者之損益分限を永世継者之無用成宗不可
年寄之儀式大道者捨可申一筆書之候也年ニ至
候得共一円不学ニ候理ニて学之風俗ニ別候旨

商家食往来ニ外見を憚り酒宴遊興ニ長し
武使人の色ニて落人却而融通ノも手之不法之借
銭不正仁之開堂無理訴白中付候類も其之宿
之義ニも右体之事可有一己之栄耀を以て候事を
宜し商売以外の事ニ候間之是迄の世話等而
是候処何之意趣も不足之費通不被為人事ニ候
役方も何記之上之差支之場所ニも一統御仲知合取締
猶何仁恵も何深く候由候条猶以難有筋ニ存
難上を恐れ御無遠慮別而多分之不勝一字ニ文

武之道ニ励ミ倹約之義ハ相守、猶又隙ニハ
不足之者ハ相武芸等ニ見聞仕、朋友親族共ニも
申付候、子孫迄厳制いたし家名を
保候様孝ニ叶候様風儀を改可申事ニ候、此上ハ
心得違無之様ニ而一際當座之御沙汰ニ相成候ニ
候条、其旨を能々相心得、頭支配ニおゐても
厚教示可致事ニ候
右之通万石以下ニ而も可申達候
九月

覚
此度諸行場ニ而荒地ニ而割替候郷村々大同
之御代官共見分之上大豪村町方揚口ニ而廻之一局
成方相願候ニ付、右同人前之外ニ運送方
湊清兵衛積合申付並ニ入札被成候ニ而も来ル
十八日迄ニ村請之者共荒地ニ而鉄砲方小屋場
東可申事
右之通町中不洩様可触者也
九月十四日
町年寄
役所

以上

中橋川荒地ゟ大蔵村新田場ゟ引返し一ニ相成候間
并車小屋共運送方海陸積合入札之者明十八日
晴雨不拘於中橋川荒地川続地方小屋場ゟ願
申出候者願意承知候上ニ而於御役所茶九ツ時迄之者
且家々之趣申立可申事
右之通町中不洩様可相触候

九月十七日

町年寄
役所

丑九月十七日聞書

蒸気(ストムボウト)船新造之義ニ付阿蘭陀甲必丹(カピタイン)ゟ相
伺出候処甲必丹申立候ニ者右船を出家ニ為
以実説有之様候者有之為据置之所先年差渡候処定而
之内不用之品ニ付御渡候義ニ付亜米利幹船
取来ニ付御懇之義申出候而年限ニ
附書付遣之趣ニ而御手当被仰付候間答之義
之内相見候旨申出候始中之候旨並説

九月廿八日　御同列へ

武器渡業之義者兼而申達置候通海岸防禦之儀ニ付船中炮
術之義者勿論取調御警衛方厚被為在候取調業之事
江諸流之内西洋等之法ニ近来兎角不相成候得共習熟候様ニ
之由も相聞候処全砲術之義ハ大切之物ニ而専要之事ニ候得者其流派
ニも有之候ニ付而者其流派ニ而其余ニ候得共西洋
押方習熟之者ハ中ニ者諸流之内稽古之流ニ渡業之者ハ

渡し候様ニ而及難渋候ニ付何卒御取計被下以上

之何定も白帆急出帆仕候

右之通万石以上之衆中可被申達

九月

嘉永六年丑九月和蘭人ゟ江戸附ニ字

會所調役

年番年寄

一 蒸気船雛形 弐通

一 西洋各事類実用ニ而為御覧之

一 時計 同 二ツ揃

右之外右同毀損貝文時計之為メドンドロ仕掛之方

一 シンテーフルホウキユンテ

蒸気船製作之法を論し候書 千八百四拾年ニ出来錄 船

警衛之事要綱右洩候書

一 メヌーレンカルロンナーテ

一 トルペトル之軍書詳ニ記有之書

右之通御用ニ付来寅年持渡候様紅毛人江申渡置候

右之外ニ手八鳥居指之事以後新製之大砲書ハ持渡候様申渡置候

會所伺役

年寄年番

蘭船軍船を入用ニ付来寅年持渡持渡之事ニ付

此節一時ニ持来兼候ニ付何れ当ニ三艘ニ分ケ遣持

渡出候様被仰候亭細人数之儀ハ彼方ニ而聞済ニ而

持越候ニ付候事

但

蘭名 コルヘツト 三艘

コルヘツト　　[illegible]六艘

蒸気船　　弐之艘

右蒸気船并軍艦製造方より相頼候処紅毛人可差遣

儀ニ申事

酉九月

阿蘭陀加比丹滞留中ニ而ハ船之御用向之諸之節

左之振合を以相伺候処相済候由

加比丹存付申出候ニ付横文字和解

御用向之儀ニ阿船何艘来候共一艘ニ限り候而長崎ニ而取計候

右之手續左之通

第一ヶ条　右船々大小ニ不依阿蘭陀政府之名を以三艘迄

第二ヶ条　船々之装束を全く欧羅巴州之通ニ而續砲ハ海軍之

備船附属役ニ至迄總而海軍之官役ハ船々之指揮ニ慕

入一ト是又阿蘭陀政府ニ而定事

第三ヶ条　寄船流船ハ浦法様ニ可任之候ハ何之湊浦ニ而も右ニ可任事

第四ヶ条　船之長浦書ハ送状ニ而相返ハ一致之事ニ而唯呼
之者のと浦来ニ可渡事

第五ヶ条　船之長浦表ハ何方之船たり共湊来ニ可渡事

第六ヶ条　入津之船ハ宮様御定ハ出之当船ハ同様入可事

第七ヶ条　合船荒武器類ハ第一ニ船之全後用ハ出浦近
之儀若近ニ可有事

第八ヶ条　船之入津之後当船司相定則之迄ハ当船頭沙汰
第ニ荷物目帝武之事合沙汰之事

第九ヶ条　湊船沖ニ而破損之時ハ船ニ積候湊船ニ荷物沙汰
荷主ニ可有事

第十ヶ条　水主之事ハ船頭ニ任可許為船頭ハ相載文
船之口ニ記通り可事

第十一ヶ条　出官之者ニても船頭出官ニ可有事

第十二ヶ条　出官之者ニて何浦方之近見え深波ニ寄候
荷物ニ可有事

第十三ヶ条　出官并水主之内目帝ハ浦役被出候ハヽ責船
ハ出分之浦之者ニて荷賃船ハ直渡海帆ニ可渡事

第十四ヶ条 出島ニ海軍ニ罷有者ハ船より御奉行所へ何方ニ
而も案内可申事

第十五ヶ条 家頼之者ハ外ニも役人士官之者附添目
付之御役助之御警固宿ニ而渡可有事

第十六ヶ条 船之内用法目付人数積之上ハ其家頼之者
ハ阿蘭陀商賣人船より海軍江渡り可申事

第十七ヶ条 士官并下商中も第一ハ阿蘭陀[illegible]
被下宿ニ而渡可有事

第十八ヶ条 阿蘭陀商館日本通詞船中諸雑用之家頼之者
右日本渡海船中阿蘭陀船中雑費并家頼之者迄諸
渡し第一ハ船之代金之外ハ阿蘭陀役府ニ而可定

第十九ヶ条 船之代金并諸雑費等ハ何之年阿蘭陀商人何年限
勘定可有之事

第二十ヶ条 船ハ士官ハ阿蘭陀之第一ニ而渡候商館ニ而阿蘭陀加
比丹を以甲必丹商官ニ而渡可有事

右之通ニ而御渡候

加比丹

トンクルキユルシユス

備中之記

去年　月於浦賀而御新造之軍艦

長サ拾間　幅十八間　帆柱樫一文字　楫之本桂

船横ハ白粉塗　船縁ハ中ハ松脂塗ニ而上を

銅板ニ而張候よし

商船之外大船停止之

御法令ニ候処方今之時勢大船必要之事ニ付自今

諸大名大船製造いたし候様

御免ニ相成候　依而右船数等委細大目付江可被相伺候

右之　但船之儀者異国船ニ紛候而ハ不都合ニ付追而可被相達候

御組並之御遠慮之相達候　右之　但御本丸之

新家門以御制禁之儀候処　此度元船製造之事故御附札

嘉永元申年

九月

右之通万石以上之面々江不残可被相触候

右九月十六日御書付

今般人数調練并具足鎧着込稽古之節も
軍陣専一之要務之処是迄西洋流砲術ニ而
調練稽古被為在候向も有之哉ニ付以来西洋
外之流儀ニ而人数調練并具足鎧着込稽古
古来之昔有来候流儀ニ而当用専一ニ修行可致
候尤調練之節空砲等放候儀ハ先達而相達候
通ニ而相心得候
右之趣面々ニ而急度相達候向々ニも可被相達候

九月十五日

町奉行 宛
御勘定奉行 宛
御勘定吟味役 宛
御作事奉行 宛
御普請奉行 宛
小普請奉行 宛
遠国奉行 宛

井上左太夫御預御鉄炮之内御秘事御筒之儀
其外池田谷ゟ借請候ニも無之由差出候旨摘之節ニ付

四ッ谷御門外桃山之者共ニ被仰付候旨御門ニ而中
老中御書付被仰出候旨申候付、向之ニ而可差遣
置候事
右之通伊豫守殿被仰渡候旨申達候
九月十七日
稲葉甚左衛門

九月廿四日聞書
御老中久世大和守様御家中江戸詰之面々竈
弱之人ハ追々国詰ニ相成、江戸詰之小詰ニ従之
勤番ニ相成、尋調之義も被仰付、右ニ付家中ニ面
小身之分ハ従来之通御取立之面々右職ニ相成
右大和守様ニ而被仰付候由風説
一 当社江戸表安藤長門守様御目附之風説

九年[illegible]九月聞書

一外寇之防御筋ニ付而之義て　御遺状も有之
強ち二警固ニ而申上候飛去ニ隠密諸家之招
ニ深有之知諸藩を始ル深之如来多人ニ而西洋
之炮術之能敵事之招請候　君は招ニ与也
右様ニ而個馬る様諸家之風勇之末も精出ニ而役
も二而五之ニ而役人方之伝ハしも之御望ニ随て二而討
死二而大織ニ而呈ん様之[illegible]ニ而終家事ニ而候

善説

国立公文書館
National Archives of Japan